



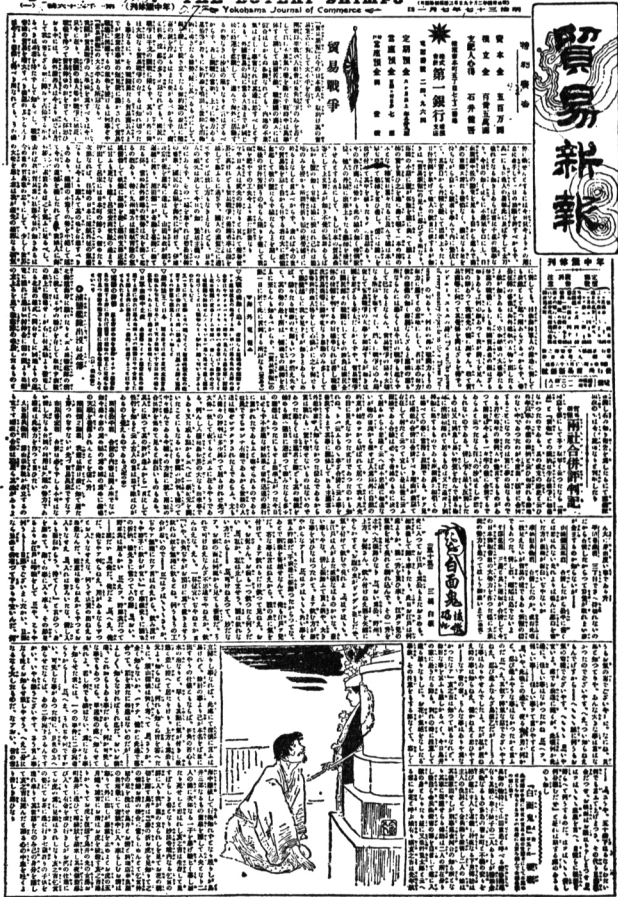
横濱新報第1105号 (明治37年6月20日付)

国立国会図書館蔵

このころ横浜には、『貿易』のほかに、二つの有力な新聞が発行されていた。すなわち『横濱新報』と『京浜新聞』である。『京浜新聞』は、一八九六(明治二十九)年に小田原で創刊された『東海日日新聞』を母体とする。経営者の神保真明・磯野三郎兄弟は、自由党の壮士であったが、やがて本社を横浜に移して、同じく自由党の富張元太郎を社長とし、一八九八(明治三十一年)五月十五日から『京浜新聞』と改題して発行するに至った。これより『横濱貿易』の対抗紙として、政論に力を注ぎ、一九〇〇(明治三十三年)年八月には千号を数えた。しかし一党に偏する編集は、しだいに市民から遠ざけられ、ことに『横濱新報』が出現すると、これに圧倒されてゆく。神保兄弟も一九〇二年には小田原に去り、別に『東海新報』を発刊した。

一九〇一(明治三十四)年二月十五日に発刊したのが『横濱毎夕新聞』であった。豪商の原富太郎・中村房次郎の後援によって、太田町に本社を設け、まず夕刊紙として発足したのである。十二月三日には佐藤虎次郎を社長に迎えた。多彩な編集陣をかかえて、社勢は日を追うてさかんとする。紙名を『横濱新報』と改めたのが、一九〇二(明治三十五年)年一月一日であり、同時に朝刊紙となった。八月には、さらに社屋を拡張するため、本町六丁目に移転した。こうした『横濱新報』の発展に着目し、佐藤に接近したのが『貿易』の富田であった。

佐藤と富田との握手は成った。富田の『貿易』は、名を捨てて実をとった。すなわち両社の合併は『横濱新報』を主体とし、紙数の計算も、第三種郵便物認可



貿易新報第1116号 (明治37年7月1日付)

国立国会図書館蔵

名について、両社の社告は次のように述べた。

「横浜貿易新聞」ハ從來「貿易」として「横浜新報」は「新報」として呼ばれたる事実に基づき、その称呼を合せて「貿易新報」と称し、此を以て両社合併の結果に生ずる新聞紙の名称に充てんとす

の日付(明治三十四年二月十八日)も「横浜新報」を受けつぐ。合併の社告が出たのは一九〇四(明治三十七)年六月十九日であり、同日付をもって『貿易』は廃刊した。そして二十日から『横浜新報』の題字のもとに、両紙が合同して続刊した。同日の号数は第千五百号であったが、前日の『貿易』は四千三百五十四号を数えていた。そして七月一日、紙名は『貿易新報』と改められる。その第一号は『横浜新報』を継承して千百十六号となっていた。なお新しい紙

こうして『貿易新報』は、七段組み、総ルビ(総)付き、六ペ建ての堂々たる一般紙として新しく発足した。もちろん『貿易』の名にふさわしく、横浜港における「出入船舶」や、生糸市況などの経済記事にも力を注いでいる。その社報にも述べられたとおり「読者は多く中流以上の実業社会に存在」していた。

発行部数も一万六千に達し、東京の有力新聞に匹敵した。すなわち『萬朝報』の十六万、『報知』の十四万などを別とすれば、当時は『東京日日』が三万五千、『国民新聞』二万、『読売新聞』一万五千というところであり、『貿易新報』は神奈川の地方紙ながら、東京の中央紙に肉薄する勢いであった。とき、あたかも日露戦争の最中である。一九〇五(明治三十八)年一月一日の紙面は、第六元且号まで設け、二十六ペという豪華版であった。

#### 『横浜貿易新報』

一九〇六(明治三十九)年十二月三日、『貿易新報』は二千号を数えた。そして当日から紙名に「横浜」を冠して『横浜貿易新報』と改題した。同日の紙面は実に四十ペに及ぶ大冊であり、第二面には富田社長みづから「三千号」と題する一文を掲げ、抱負を語っている。

……我社微力なりと雖も自から任じて横浜市の進運を叱贊するの事功を期し、横浜市の利害を代表する新紙たるを以て居る、貿易上の一機関としてその進勢に貢献すると同時に、横浜市の繁栄に資助するをその任とする以上、称して横浜貿易新報と呼ぶべしとして、二千号を機会として横浜貿易新報と改題す、横浜の新報たり、貿易の新報たる意にして、横浜貿易の新紙と謂ふに出でず、

こえて一九一〇(明治四十三)年四月五日には、創刊二十年記念号を発行した。この年数は『横浜貿易新報』の発刊から数えたものである。しかし、このころ、富田社長は思いもかけぬ刑事事件に連座して失脚し、社を去らねばならなくなった。以後の富田は文筆に専念する。かわって社長に迎えられたのが、三宅磐であった。

三宅の采配のもと『横浜貿易新報』は、明治から大正に及んで、いよいよ発展した。部数も大いに伸び、全盛期には十三万部に達した。東海の『新愛知』や、九州の『福岡日日』と並んで、地方紙における最有力の新聞であった。

もちろん『横浜貿易』に立ち向かおうとする競争紙がなかったわけではない。一九〇二（明治三十五）年十月十一日には『美奈登新聞』が発刊された。八頁建ての日刊紙であり、創刊号には銅版刷りの美人画を付録につけた。つづいて週刊紙の『横浜めざまし新聞』や『横浜新聞』が発刊された。

週刊紙のなかで発展したのが、一八九八（明治三十二）年十二月に発刊された『内外商業週報』である。記事は和英両文で掲げた。やがて牧内元太郎が経営を引き受け、一九〇三（明治三十六）年九月一日から『毎朝新聞』と改題して、日刊紙として発足する。さらに一九〇八（明治四十二）年四月には『横浜毎朝新聞』と改題し、一時は『横浜貿易』に対抗するまで部数を伸ばした。しかし大正中期には、経営の失敗からしだいに衰え、大震災の打撃によって廃刊に追いこまれた。

横須賀においては、一八九九（明治三十二）年に日刊紙『公正新聞』が創刊され、一九〇七（明治四十）年までつづいた。一九〇五（明治三十八）年九月には『相模中央新聞』が発刊され、部数は少なかったが昭和まで続刊する。また一九〇五（明治三十八）年五月に旬刊紙として発足した『横須賀新聞』は、一九〇七（明治四十）年五月から日刊紙となって『武相新報』と改題した。この二紙が横須賀の新聞を代表したが、一九二三（大正十二）年の震災後『軍港よろづ新聞』が創刊され、一時は大いに伸びて部数も五千部に達した。しかし内紛が起こって衰退し、同社を去った樋口宅三郎は一九三一（昭和六）年三月十日『横須賀日日新聞』を創刊した。

このころ『横浜貿易新報』も、もはや往年の面影はなかった。三宅社長が政界に進出して、社業を顧みなくなったことが、大きな原因であった。加うるに東京の有力紙が横浜に進出して『貿易』の地盤を奪っていった。一九三五（昭和十）年に三宅

が死去すると、たちまちにして同社には内紛が起こり、一九三六（昭和十二年）年には休刊、また休刊、そして四月には分裂の結果、二種の『横浜貿易』が発行される事態を招く。こえて一九四二（昭和十七）年二月一日、当局が一県一紙の統制を強行するに及んで、県内各紙は統合され『神奈川新聞』が誕生した。しかし、その経営の主体となったのは、凋落した『横浜』ではなく、『横須賀日日』の後身である『神奈川日日新聞』であった。

## 二 湘南地方の開発

**最初の海水浴場** 海水浴場として最初に開かれたのは湘南の海岸、とくに大磯であった。近代医学の開拓者であり、陸軍軍医総監の地位にあった松本順（蘭疇）は、大磯の海岸（南浜）が海水浴場として好適であることに着目し、

一八八五（明治十八）年八月、ここに施設をつくらせた。

……（海水浴場としての）要点は、東南に向ひ、西北に背き、砂場広くして、介殻なく、海底は礫或は砂石の大なる者より成り、潮水清澄にして毫も河水を混ぜず、波濤激搏して危険の虞なく、潮汐の満干殊に大なる等、此数点完備するを以て最上の浴場と為す。而して大磯の地は、悉く以上の諸点を備へ、太平洋の潮流、大島に激し、反流して潮頭尖稜を為し、直ちに照が崎を衝く。是を以て、潮汐の満干亶丈に及ぶ。是近傍海辺に於て未だ見ざる所なり。且西に酒匂川あるも、其水流は皆石橋山の下に向ひ、東に相模川花水川あるも、其水流は皆江の島鎌倉に向て去る。是太平洋の潮勢を以て、諸川を左右に分排するなり。……

さらに大磯の地にはバクテリアも発生していないことが、調査によって判明した。よって松本は大磯を「本邦第一」の適地

と断じ、一八八六（明治十九）年には『海水浴法概説』を著して、その方法を解説するとともに、大磯を紹介したのであった。一八八七（明治二十）年七月には鉄道が国府津まで開通し、大磯にも停車場が設けられた。東京や横浜から出むくのも、すぐる便利となった。大磯の海水浴場は、年とともににぎわってゆく。

ところで大磯は東海道の宿場であったから、旧来の旅籠屋はたごやも多かった。しかし海水浴客のためには、新しい施設をそなえた旅館の開設が望まれるに至る。そこで一八八七（明治二十）年には、海岸に面して禱龍館、停車場に接して招仙閣が、海水浴客のために開かれたのであった。当時は海水浴といっても、日帰りは少なく、滞在することが多かった。そこで旅館を必要とし、政財界の有力者は、やがて別荘を営むようになる。大磯をはじめ相模湾に面する一帯は、夏季ばかりではなく、冬季の避寒のためにも好適であった。明治二十年代になると、つぎつぎに別荘が建てられてゆく。

大磯につづいては、平塚・茅ヶ崎、そして片瀬や鎌倉の海岸にも、海水浴場は開かれていった。このあたり一帯は「湘南」と呼ばれるようになる。湘南とは中国において湘水の南方に当たる景勝の地をさす語である。それを相模の南部、すなわち相南に結びつけたのであった。

### 別荘と御用邸

三浦半島の葉山も、保養地として好適であることが、明治十年代の末からしばしば来遊した医師ベルツらによって紹介されていた。明治二十年代の初めには、ベルツやイタリア公使マルチーノらが、別荘を建てている。以来、葉山に別荘を営む者があいついだ。有栖川宮や北白川宮の別邸も建てられた。

有栖川宮別邸には、一八九二—三（明治二十五—六）年に英照皇太后や皇太子（のちの大正天皇）も、保養のため滞在した。これが機縁となって、皇室の御用邸が建造される運びとなる。一八九四（明治二十七年）年一月、建築は完成し、葉山御用邸と命名された。英照皇太后や昭憲皇太后は、避寒に避暑に、この御用邸を利用した。

大正天皇も、皇太子の時代から病氣療養のため、しばしば葉山におもむき、長期にわたって滞在した。即位の後も行幸することが多く、葉山御用邸は行在所となった。崩御されたのも、また葉山においてであった。

さて再び時代をさかのぼって一八八九（明治二十二年）四月、医師ベルツは公使マルチーノとともに、箱根および真鶴に出かけた。それは「美しい林でおおわれた真鶴崎が、どんなに一流の冬期療養所や海水浴場を提供するか」を確かめるためであった。すでに相模湾に沿った一帯の海岸が、保養地として着目されていたのである。

このときベルツの一行は、国府津まで鉄道で行き、それから先は小蒸気船を利用した。すでに馬車鉄道は国府津―小田原の間に開通している。小田原から真鶴をへて熱海まで人車鉄道が開通するのは、一八九六（明治二十九年）三月のことであった。

その間の一八九〇（明治二十三年）十月、伊藤博文の別邸が小田原に落成し、滄浪閣と名づけられた。伊藤を総裁として法典調査会が設けられたのは一八九三（明治二十六年）年であり、これより旧民法（一八九〇（明治二十三年）公布）の改正と、新民法の起草が進められる。そして新民法の一部は一八九四（明治二十七年）年、この滄浪閣で起草されたのであった（一八九六（明治二十九年）公布・一八九八（明治三十一年）年施行）。

伊藤につづいて、小田原に別荘を営む者も多かった。一九〇一（明治三十四年）五月には、小田原城内に御用邸も建てられた。しかし伊藤みずからは一八九六（明治二十九年）年に小田原を去る。かねてから伊藤は小田原におもむく途中、大磯に立ち寄って招仙閣に一泊することが多かった。こうして、しだいに大磯の地に愛着を覚え、ついには大磯に別邸を建てるに至る。その完成を待って小田原の別邸を売却し、滄浪閣の名も大磯別邸に移したのであった。別荘の地として大磯は、これよりいよいよ栄えた。

小田原には一九〇七（明治四十一年）九月から、山原有朋が移り住んだ。その邸宅を名づけて古稀庵という。この年に山県は



南湖院第1病棟（1899年） 高田準三氏蔵

七十歳に達したからであった。これより一九二二（大正十一）年に没するまで、晩年の山県は、おおむね古稀庵に起居したのである。

大磯といい、小田原といい、明治の元勲が居を構えたことにより、時として政治の中心が、その地に移る颯を呈した。大事件、とくに政変あるごとに、政客は大磯に、小田原に走った。湘南の海岸は、名士の別荘が建てられたことにより、天下の耳目を集めたのであった。

#### 南湖院

藤沢と平塚の間に位する茅ヶ崎に停車場の開設されたのは、一八九八（明治三十一）年六月であった。すでに海水浴もさかんに行われ、別荘もつきつきに建てられている。この茅ヶ崎の南湖の海

岸に、一八九九（明治三十二）年九月十五日、のちには東洋一の結核療養所と称される南湖院が開かれた。

南湖院を創設した高田**明安**は、京都府の出身であったが、帝国大学においてベルツの指導を受け、一八九六（明治二十九年）には神田駿河台に東洋内科医院を設立した。そして三年後、茅ヶ崎に支院を設け、南湖院と名づけたのである。湘南の空気が結核の治療および療養に好適と見なされたためであった。明安は、その書簡のなかにも「当地ニ而東京之恢復期患者等二便宜ヲ得サセ度ト之希望ヲ起シ候」と述べている。

明安の父、増山守正もまた医師であった。なお明安は母方の姓を嗣いだ者である。南湖院が開かれるに当たり、病院を訪れた守正は、茅ヶ崎の風光を次のように記した（『静香園詩文雜稿』原漢文）。

……地ノ大イサ凡ソ巷万坪。瓦屋巍巍トシテ万松茂樹ノ中ニ聳立ス。此ノ日、天気晴朗。西ノカタ富嶽ヲ眺ムレバ、突兀



トシテ天ヲ衝ク。北ニ大山及ヒ高麗寺等ノ高山アリ。マタ茅崎八景ト称スル者アリ。鶴峯ノ暮雪、姥嶋ノ帰帆、高砂ノ秋月、住吉ノ夕照、西運ノ晚鐘、柳嶋ノ落雁、南湖ノ晴嵐、真崎ノ夜雨、等是レ也。此ノ地ニ停車場アリ、海水浴場アリ、人員輻湊シテ、戸数増殖ス。益々繁盛ヲ致スト云フ。病院ハ海辺ヲ去ルコト数町、散歩シテ之ヲ眺ムレバ、東ニ烏帽子岩及ヒ江嶋ノ観アリ、銀濤ノ起伏ハ雪ノ如ク、掀翻スルコト花ノ如シ。万船往来絶エズ。南方ハ海ニ面シ、極目限りナシ。真ニ水天髣髴青一髪ノ景況アリ。……

国木田独歩も結核を病んで、一九〇八（明治四十二年）二月、南湖院に入院した。そして六月二十三日に死去したが、独歩の文名によって、南湖院と茅ヶ崎は天下に知られるに及んだ。

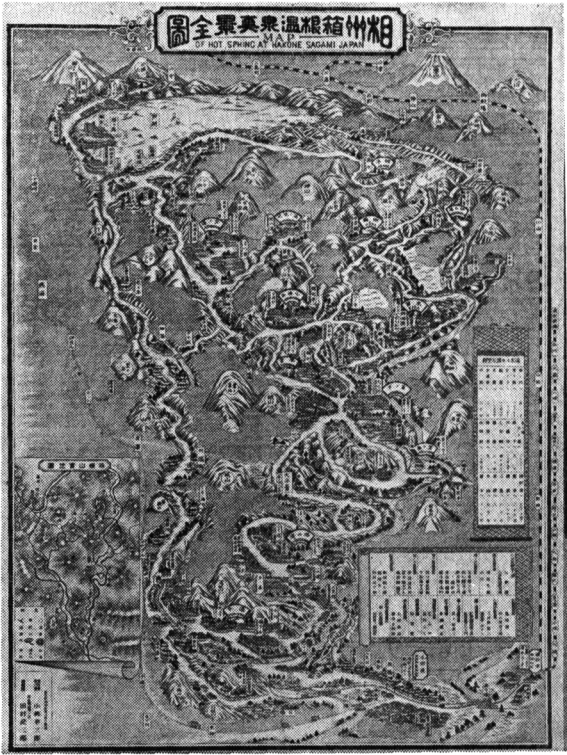
晁安は熱烈なキリスト教信者であった。病院の設立も、信仰にもとづく。しかも独特の解決をもって信仰をつらぬき、イエスを医王と名づけてクリスマスを医王祭と名づけ、南湖院において盛大な医王祭を催した。一九二二（大正十一年）には医王団を結成しているが、その趣意を述べたなかには、晁安の医療思想がよくあらわされている。

吾らは曾て人性の医療の為に誠意尽力し給ひしに、世人の罪惡の故に苦められ給ひ殺され給ひ、而して神に因て甦らされ給ふたる医王の志を吾らの志として、人性を其病態より救ふを以て吾らの天職と認む。

南湖院に入院する者は年を追うて多く、病棟もつぎつぎに増築していった。開院から一九二五（大正十四年）十一月までの十六年余の間、入院患者の総数は四千二百人をこえた。結核の治療を主体とし、安静療法を行っていたが、チフスや赤痢などの伝染病も治療した。

### 行楽地と保養地

横須賀線の開通（一八八九（明治二十二年））によって、古都の鎌倉は観光地としての色彩を濃くしていった。列車を利用すれば、東京や横浜から鎌倉へ、日帰りの行楽ができるようになる。さらに海水浴が普及



相州箱根温泉真景全圖 (1902年) 神奈川県立文化資料館蔵

すると、夏の鎌倉は絶好の行楽地となった。海岸には別荘が立ち並んだ。しかも鎌倉には夏季の間だけ別荘を賃貸することも行われたから、いわゆる中流の人びとまで、手軽に避暑を楽しむこともできた。

明治三十年代から明治四十年代にかけては、江ノ電の線路が鎌倉まで伸ばされてゆく。江の島と鎌倉とが電車で結ばれてからは、ふたつの観光地は、いよいよにぎわった。江の島も鎌倉も、東京や横浜に近いことが、何よりも魅力であった。

温泉を求める人士は、箱根までおもむいた。

国府津から箱根湯本まで、馬車鉄道の開通したのは一八八八(明治二十二年)、電車が走るようになったのは一九〇〇(明治三十三年)のことである。東海道線と電気鉄道を乗りつげば、簡便に湯本まで達することができるようになったのであった。古くから湯治場として栄えてきた箱根は、明治の後期から保養地として発展してゆく。別荘も立ち並び、芦ノ湖にのぞむ丘の上には一八八六(明治十九年)年に離宮が建てられ、一八九五(明治二十八年)年には宮の下に御用邸が設けられた。

東海道の本道を三枚橋で分かれ、西へ進めば湯本をはじめ、箱根七湯と呼ばれる湯治場が開発されている。湯本から塔之